

“中国人の代弁者”吉田東祐の活動と議論 —日中戦争末期、占領地における意識

関 智英

I はじめに

本稿の目的は、日中戦争末期の中国大陆の日本占領地（以下占領地）における言論空間の実態に迫ることである。すでに筆者は複数の論稿で、占領地の中国人の言論について検討してきた。その内容を概括すれば、日中戦争開戦から1940年に占領地に汪精衛政権が成立する頃までは、日本の占領が比較的に長期間に亘るとの見通しの下、日本の占領を前提として中国の将来を展望する議論が具体的な内容を伴いつつ盛んにおこなわれたもの（関2013）、日本の対米英宣戦布告、さらに日本の戦局が悪化するに伴い、こうした議論は減少し、その内容も具体性を欠き抽象的なものが中心となつた、ということになる（関2016ab）。中には胡蘭成のように、汪政権と袂を分かつ、独自の立場から占領地と中国の将来を占つた人物もいたが、例外的な存在であった（関2017b）。日本軍や汪政権の言論統制もあり、占領地において当局の批判に繋がるような自由な議論を展開することは難しかつたのである。

こうした中、日本人であることで比較的自由な立場から議論を展開できたのが吉田東祐だった。吉田東祐は陸軍の嘱託として上海で活動していたが、1943年からは『申報』などで積極的に議論を発表した。その内容は、本稿で明らかにするように、占領地にありながら重慶国民政府を意識し、時に汪政権や日本当局を批判するもので、「中国人の代弁者」として占領地はもちろん、抗戦側の中国人からも注目されていた。

本稿ではこの吉田東祐の活動と議論を材料に、戦争末期の占領地の言論空間の実態に迫ってみたい。行論に際しては、日本の公文書の他、『申報』、吉田が顧問を務めた中国建設青年隊発行の雑誌『中国青年』『新生命』の記事を検討した。これら吉田の文章のほとんどは後に吉田の論文集『日華問題の全面的解決の為めに』『日本の反省と中国の革新』『重慶政権の分析』（それぞれ中国語版・日本語版があるが内容は同じ）に収録されたため、本稿での引用は日本語版論文集を用いる。また戦後出版された各種回想も利用した。

II 上海に渡るまで

(1) 吉田東祐略歴

吉田東祐については一部の人名辞典に名前が掲載されるものの、著名な人物とは言えな

いため、まずその経歴を簡単に紹介する。吉田東祐（本名鹿島宗二郎¹⁾：1904年6月13日～1980年6月1日）は、東京下町の彫金師の家に生まれ、府立四中を経て東京商科大学を卒業した。企業に一時勤務の後、教壇に立ったが、共産主義と関係ありとして学校を追放された。その後は古書店を開いて生計を立てたが、日本共産党で活動したため検挙された。1936年、軍のつてで上海に渡り、日中開戦後はその関係で対重慶直接和平工作に従事した。1946年に帰国後は、愛知大学財務理事・国士館大学教授などを歴任し、中国関係の著述活動に従事した他、R.スウェアリングン・P.ランガー共著『日本の赤い旗—日本共産党三十年史 1915-1952年』（コスマポリタン社、1953年）、ハロルド・R.アイザック『中国革命の悲劇』（至誠堂、1966年）などの翻訳紹介も行った。

（2）日本共産党との関わり

吉田東祐の回想によると、1927年に東京商科大学を卒業後、米国人経営の鉄鋼会社に就職した吉田は、関心を持ったマルクス主義を研究するため会社を辞め、巣鴨高等商業学校・横浜専門学校に奉職した。しかし、学校内に教員互助会を設立したこと、学校を追われ、「食うためにやむを得ず、古本屋を開いた」。その古本屋の顧客の一人から、自分たちの会合をやりたいから、と貸部屋の提供を依頼されたことが、吉田が日本共産党と繋がる直接の契機となる。

吉田が、部屋を貸したところ、古本屋の二階に集まったのは岩田義道ら日本共産党中央委員であった。「はじめは中央委員会の会合の場所や住宅の斡旋など、ごく下積みの仕事をしていた」吉田だが、「割り当てられた仕事はよくやったので、間もなく入党を許され、大口資金の獲得を任務とする中央委員会直属の特別資金局B班に配属された」。

資金集めに奔走した吉田は、「その頃洲崎にあった、私立飛行学校の経営に割り込」み、「シンパサイザーの金をその学校に投資させ、その半額を党に寄付させる」ことをもくろんだ。しかし、まもなく活動は露見し、吉田も検挙された（『東京朝日新聞』1932）。

日本共産党との関わりは、吉田自身の認識としてはそれほど深かった訳ではない。吉田は「要するに私には、マルクス主義はわかっていても、てんで“階級意識”というものがなかったのだ」と振り返り、「法廷では、マルクス主義は正しいとは思いますが、私は自分の生活が可愛いから、二度と運動はいたしませんとあっさり転向を表明した」（吉田1958, pp. 14-15）。

執行猶予の判決を受け1933年暮れに出所した吉田は、「ささやかな良心と飯茶碗と一緒にみたす」ため、月刊誌『生きた新聞』を発行した。しかし同誌に「黒崎和助」のペンネームで寄稿した神山茂夫の文章が当局の禁忌に触れたため、1935年7月吉田は神山らとともに逮捕された（『東京朝日新聞』1935・1936）。

この逮捕は警察当局でのつち上げで、まもなく関係者は全て釈放された。背景には警察と憲兵との対立も影響していたという。そしてこの時吉田を担当した憲兵の意向や、参謀

1) 中村義 他編では、本名が吉田東祐となっているが、ペンネームである（鹿島 p. 97）。

本部が吉田の執筆した文章に関心を持ったことで、吉田は上海に渡ることになる。吉田が「支那屋」となった、そもそものきっかけは、次のようなものだった。

……その憲兵は私を内地においては、また面倒なことがおこると思ったのだろう、或る日私にやぶからぼうに、上海に行ってくれないかといった。もっともその前に彼は、世界情勢について、私の書いたものをもって行ったが、それがどう廻りまわったか知らないが、参謀本部のロシア班の人々の興味を惹いていたそうだ。私は間もなく日本陸軍の有数なソ連通といわれている秋草〔俊〕中佐と、赤坂の料亭で会うことになった。彼は、もし私が自分の責任で上海に行きつき、ああしたものを見てくれるなら、現地の生活費ぐらいは出そうといった。（中略）とこうしているうちに二・二六事件の後に行われた、左右両翼の一斉検挙にあって、またぞろ拘留されてしまった。これで、もういよいよ内地はごめんだ、なんとしても上海行きを決行しなければならぬとはっきり気持がきまつた（吉田 1958, pp. 18-19）。

中国大陸の中でも上海を選んだ点については、「ほんとに党〔=日本共産党〕を再建しようとする真面目な革命家を何とかして助けてやりたいといふ気持ちだけは残つてゐた。（中略）私は私のルートを利用してその連絡者を上海まで安全に送りとどけてやらうと考へてゐた」と言うように、日本共産党に対する素朴なシンパシーも背景にあった（吉田 1949, p. 215）。実際吉田が上海に渡って二ヶ月目に、神山茂夫は反帝同盟のキャップをしていた三浦重道を上海へ逃がし、岩田義道の愛人だった安富淑子も、吉田の手引で上海へ渡ろうとしたという（吉田 1958, p. 24）。

III 上海での生活

（1）中国語の習得

1936年7月、上海に渡った吉田東祐は、フランス租界の震旦大学に近いユダヤ人の貸し部屋に入った。中国語を学んだことのなかった吉田は、「友達のない悲哀、言葉の通じない悲哀をしみじみ味つた」。来滬から7年後の回想「始めて上海に来た頃」（1943年12月22日）では、吉田が中国語を身に付けていった事情を活き活きと伝えている。

……中国で暮らすためには支那語だけは何とかしなければならないと思った。しかし、その支那語の難かしさ、忘れもしない Aldrich の「華語須知 Practical Chinese」の一巻を四馬路の古本屋から見付け出し、その発音記号をたよりに独習を始めた。（中略）しかし上海の人には私の独習の北京語の発音では全く通じない、（中略）此處で気持ちよく暮らすにはどうしても日本人ではいけない、自分が中国人になりきらなければいけないと思った。それから私の中国人にならうとする生活が始まった。支那語の本を独習するのはやめて了ひ、毎晩「大世界」に通つて北京語の話劇を聞いて耳をならした。（中略）乞食が金を貰ひについて来るとその乞食が支那語で何と謂ふかを耳をすまして聴いてゐた。（中略）かうした勉強が私の上海の生活を緊張させ、郷愁を追い払ひ、中国に興味を覚へさせたのであらう。それからはぐんぐん支那語は上達し友

達も増へ、上海の生活が面白くなつてきた（吉田 1944b, pp. 55-56）。

（2）抗日救国会との関わり

上海へ渡ってから間もない1936年9月、吉田東祐は抗日救国会のメンバーの知遇を得た。デモで怪我をした史良（救国七君子の一人として知られる女性弁護士）を、友人の勧めで見舞いに行き、名刺を残したところ、数日後史良が通訳を連れて吉田を訪ねてきたのである。吉田に会った史良は、日中関係について次のように語った。

日本人々は、中国人が日本人をうらんでいると思われるかしりませんが、私達は決して日本の人民に敵意をもってはおりません。私達は日本の人民が、軍閥の圧迫で、中国問題について自分の意見を発表する自由を奪われていることをよく知っています。私達は日本の中国侵略は、日本人民の意志ではないと思っております。それと同時に、日本の人民がどうしてもっと強くならぬか、どうして軍閥にああいうことをさせておくのか、中国人はそれをはがゆく思っております（吉田 1958, pp. 37-38）。

史良の訪問から間もなく、「救国会の人々が私〔=吉田〕のためにささやかな歓迎会」を開いた。「その席には上海救国会の領袖沈鈞儒、章乃器、沙千里その他のお歴々が多く出席」した。吉田と救国会のメンバーはその後「四五回個人的な会合をもっているうちに、おたがいに中国の内外情勢を親しく語りあうほどの間がらになった」という（吉田 1958, p. 38・42）。上海に到着して間もない、中国語もあまり話せない一日本人に対するものとして、救国会の対応は破格である。おそらく抗日救国会のメンバーは、吉田の日本国内での活動（さらには後述する日本軍との関係）を、把握していたと考えるのが自然だろう。

（3）日本軍との関係

吉田の上海での生計を支えたのは日本軍である。「旅費ももうのこりすくなになつていて」吉田は、一日「秋草から紹介されていた喜多將の官舎」へ向かった。喜多誠一には秋草俊から連絡があつたとみえ、吉田を塚本誠（憲兵大尉）に申しつけた。奇遇にも塚本は中学校で吉田の一年先輩にあたり、「君のことはよく知っている、まあいいから、当分いまのまま遊んでいろ、そしてなにか面白いことでもあつたら知らせてくれ」と、特別な要請はなかったという（吉田 1958, pp. 22-23）。

吉田と喜多との関係については傍証もある。上海で憲兵として吉田東祐と接触のあった林秀澄は戦後次のように吉田と喜多の関係を証言している。

……秋草中佐から當時上海の大連館付き武官をやっていらっしゃった喜多誠一、後の大将でございますね、彼の所へ「喜多さん、これを使わんか」、「使おう」と、いうことで鹿島氏〔=吉田東祐〕は上海に渡航して、それであとは武官府から金が出ておつたのか（中略）、とにかく軍で月々生活費をあてがって主にフランス租界に潜入させておつたというのが戦前の彼の経験でございます（木戸日記研究会III, pp. 101-102）。

では具体的な吉田の活動はどのようなものだったのか。後に塚本から吉田の情報網を引き継いだ林秀澄はこの点についても次のように語っている。戦後も中国問題で吉田に意見

を仰いでいる点は、吉田の情報分析に対する林の信頼の高さを伝えている。

……塚本〔誠〕が（中略）吉田東祐、この人を私に紹介しまして「これはもと、アカのだけれども、アカで警視庁から追いかけられているのだけれども、この人物の活用価値を参謀本部が見込んで、それでいま情報勤務に使っておるのだ。上海に潜入したのは、上海事変以前なのだ。私は、吉田君の話は毎週一回は聞いておる。林さんあんたも一つ、今後そうしてくれんか」という話がございまして、私は、上海におります間は、ほとんど塚本君のやったとおり吉田東祐氏の話を毎週、小料理屋の密室に行きまして、二人で三時間位、毎週聞いておりまして、具体的に吉田氏の持つておる支那観、どういうことを吸い上げたと言われるとちょっと具体的には言えませんけれども、考えてみまして、彼の支那観を引き継いだことが、ある意味から、私を大陸勤務中、過失ながらしめた所以じゃないかというような気がいたします。現在でもこの吉田東祐、現在は鹿島を名乗っておりますが、鹿島氏のところに、支那問題でわからないことがありますと、彼の意見を仰ぐようにしておるわけですが、非常に立派な意見の持主だと思います（木戸日記研究会Ⅱ, p. 246）。

こうした軍の要請に、吉田は如何なる情報を提供していたのか。当時吉田は「救国会との接触によって、時局がこういう結果にむかってばく進してゆくのを、切実に認識するよう」になり、「戦争をくいとめるために、なんでもいい、私なりの努力をしなければならぬ、と感ずるようになった」という。そして「この戦争をくいとめるためには、軍部がその考えをかえるようにしむけるのも、ひとつの道である」と考え、「この戦争の相手方が、今までのような不統一な中国ではないこと、したがって戦争が起これば、非常な長期戦になり、結局へとへとなるのは日本であることを知らす」べく努めた。また塚本を通じて「幾度となく報告を書き、意見書を提出し」、「そのなかで中国の政治情勢を詳細に分析し、蒋介石に圧迫を加えることによって、彼を抗戦運動から引きはなす」という考え方がある、「いかに間違っているかを説明した」（吉田 1958, pp. 47-48）。こうした吉田の中国認識は後の言論活動で遺憾なく発揮されることになる。

IV 対重慶工作（姜豪工作）

（1）小野寺機関

吉田東祐が本格的に重慶との交渉に関わるようになるのは、1938年10月、参謀本部部員の小野寺信が、中支那派遣軍司令部附となったことに端を発する（岡部伸）。当時参謀本部では支那班を中心として、占領地政権樹立工作が進められていた。汪精衛擁立工作もこの一環である。これに対し、参謀本部ソ連班出身の小野寺らは、重慶国民政府との直接交渉を目指した。これは支那班の方針と対立ものだった。吉田は小野寺機関の発足と、小野寺の立場について次のように説明する。

南京が陥落して、そこに総司令部ができると間もなく、ソ連班から上海に、小野寺信という中佐参謀が派遣され、私に連絡をとってきた。（中略）彼は内地から、二十人

ほど左翼の転向者をつれてきて(中略), 満鉄調査部のような, 一種の諜報機関をつくっていたが, ほんとの任務はそんなものではなかった。(中略) 小野寺は, この際日本の行動を束縛するような中日戦争を, 一日も早くやめさせなければいけない, それに今までの行きがかりにこだわらず, 蔣介石と和平交渉を開くほかはないという主張をもっていた。

吉田との初対面で小野寺は, 「僕は中国のことはまるでわからないが, ただ東京で, 上海に行ったら一切は君にたのめと言われている。いわば君が唯一のたよりなんだから, 何とかして, その糸口をさがしてくれ」と語った(吉田 1958, pp. 87-89)。

(2) 重慶との交渉

小野寺から和平交渉の相談を受けて吉田が想起したのは, 重慶国民政府側(吉田は回想録で上海地下政府と称す)のCC系と繋がりを持っていた朱泰耀であった。吉田は, 慶應義塾大学へ留学経験を持つ友人楊健威の紹介で, 以前からこの朱と面識を持っていた(吉田 1949, p. 273; 吉田 1958, p. 91)。楊健威について吉田は詳細を語っていないが, 別名は楊鵬搏といい, もともと思想的に左傾であったため日本共産党に同情的な吉田東祐と相知り合ったという。楊鵬搏は吉田の通訳を担当するとともに, 当時は朱泰耀と同じく中華民国維新政府の教育部督学であった(姜豪 p. 180; 維新政府概史編纂委員会 p. 200)。

小野寺に面会した朱泰耀は, 小野寺を呉開先(国民党組織部副部長)と引き合わせることを約束し, 1938年12月には香港で面会する手筈となった。しかし, 丁度その時期に汪精衛が重慶を脱出した(吉田 1958, pp. 101-102)。汪精衛工作が成功すれば, 直接和平の重大な障害となると考えた小野寺・吉田らは, 引き続き水面下で話を進め, 「日華両国の大物代表を香港で会見させようということになった」。そして吉田が呉開先の代理であった, 「上海の国民党代表姜豪とともに香港に行き, この会見を準備し, 小野寺は東京で, 日本の首脳部に働きかけ, 国論を直接交渉の線にまとめるようになった(吉田 1958, p. 104)」(姜豪工作²⁾)。

吉田東祐の手許にある小野寺の覚書によれば, 小野寺は「大本営及び陸軍省を動かし, 近衛〔文麿〕又は板垣〔征四郎〕を, 蔣介石又はその代理者と会見させ, 一举に事変を解決することを狙っていた。「そして対中央工作は小野寺自ら担当し, 会見の下準備は朱〔泰耀〕, 姜〔豪〕とともに吉田を香港に派遣して, 呉開先, 杜月笙らを通じて, これを進めて貰う心算であった(吉田 1958, p. 105)」。この工作には吉田東祐だけでなく, 近衛文隆(近衛文麿の長男)も関わっていた。近衛文隆は吉田とは別に, 同じく重慶国民党の特務である戴笠の統括する藍衣社を通じての直接交渉を狙っていた(吉田 1958, p. 106)。

1939年5月9日, 吉田が交渉相手としていた姜豪が上海で汪精衛派の特務李士群らに逮捕され, 日本の憲兵隊に引き渡される事件が起きた。東京でこの知らせを受けた小野寺

2) 姜豪工作については楊天石が姜豪回想録等に基づいて検討したが, 吉田東祐についての説明は回想録の内容をこえるものではない。

は「陸軍次官及び臼井〔茂樹〕と相談して、釈放の大本営命令を出して貰」った。小野寺によれば「大本営では汪擁立に疑惑を抱いてきた作戦課の中枢、秩父宮中佐、堀場一雄少佐等と意見を交換したが、何れも暗黙内に鞭撻してくれた」という（吉田 1958, p. 109）。

小野寺らの活動を挫いたのは、1939年6月の平沼騏一郎内閣による汪工作指導要綱の決定であった。小野寺は陸大教官に異動となり、関係者の殆ども内地に送還された。姜豪の釈放後、姜豪・朱泰耀らを伴って香港に移っていた吉田東祐は、「香港から毎日のように、かねて打ちあわせた暗号電報で、交渉の経過を小野寺に報告し」ていた。しかし、間もなく小野寺の左遷と、上海の険悪な情況が伝えられてきたため、吉田は姜豪に事情の変化を話して、密かに上海に戻り、姜豪はそのまま重慶に入った（吉田 1958, pp. 110-111）。

(3) 吉田東祐の情報収集力

小野寺が帰国する直前の話として、吉田東祐の情報収集力について先の林秀澄が証言している。林は一日、藍衣社の戴笠に会ったことがあると言う小野寺に、戴笠の写真を含めた五枚ほどの写真を見せた。写真を見た小野寺はその中に戴笠はいないと言ったが、吉田東祐はみごと戴笠を言い当てたというのである。

……ところが、ちょうどその話しをしております時に偶然、これは約束もなにもしておったんじゃないんですが、そこにきょう申し上げました鹿島宗二郎〔=吉田東祐〕氏がおりまして、小野寺さんが戴笠はいないと言っている横丁で「機関長、これが戴笠ですよ」と言って彼が言った写真が戴笠なんです。私はそれを、鹿島というやつは相当なやつだと思いまして、それ以後また彼の価値を見直したわけです。（木戸日記研究会Ⅲ, p. 114）。

このエピソードは吉田東祐の情報収集能力の高さを伝えるものではあるが、同時に先の近衛文隆を通じた藍衣社の戴笠との直接交渉の相手がいかがわしいものであったことも示している。

(4) 小野寺信異動後の動き

以上見てきたように、重慶との直接和平交渉は、日本政府の閣議決定、さらに小野寺信の異動で頓挫した。しかし小野寺は吉田東祐に「今直ぐ〔重慶側と〕直接交渉をやるわけにはいかないが、それをやる時期が近い将来に必ずやってくるだろうから」、「現在の直接交渉路線をつないでおいてくれ」と要請し、水面下では吉田と姜豪のルートは残された（吉田 1958, p. 112）。汪政権工作に携わっていた谷萩那華雄大佐も吉田に対し、「今まで直接交渉をやっていた線を利用して、重慶側の情報をいれてくれるなら、ここにおいてもいい」という態度であった（吉田 1958, p. 113）。汪政権工作担当者の中にも、日本は蒋介石を全くそでにし、汪精衛と本気で結合を考える影佐禎昭・谷萩那華雄と、汪精衛をあて馬として、最終的な目標は蒋介石との和平を目指す、今井武夫・臼井茂樹という、異なる考えが併存していた。このため吉田は、表面上は谷萩の、実際には今井の指揮で、姜豪らと連絡を続けた（吉田 1958, pp. 116-117）。

汪政権が成立する直前の 1940 年 2 月、吉田東祐はマカオで姜豪・朱泰耀と会った。期待していた蔣介石の全権委任状に類するものを姜豪が持っていないかったため吉田は落胆したが、それを見て取った朱泰耀は「汪精衛の脱出以来、重慶からの飛行機旅行は厳重に制限されており、だれでも軍事委員会の許可がなければ乗れないことになっています。姜豪君が今度でてきたのは、勿論最高当局の命令があつてのうえ」と語った。姜豪は「日本からほんとうに、秘密交渉を開くために大物全権をだすつもりならば、勿論蔣介石もそれに応ずる代表をだす用意はある」としたが、「その交渉をひらくまえに、まず原則的な問題について、大体の了解ができていなければ」ならないと述べた。そして和平の最低条件として、1. 日本が中国の領土主権を認める（満洲国の領土主権も中国にある）、2. 無賠償、3. 少なくとも華中・華南からの日本軍即時撤兵、を示した（吉田 1958, pp. 130-135）。

この三条件は、同時期今井武夫らが進めていた宋子良工作で、重慶側が提示したものとほぼ同様のものであった。吉田は姜豪との顛末を今井武夫に報告したものの、結局直接交渉はその後途絶えた。吉田によれば、これには交渉の直後の 1940 年 3 月 30 日に汪政権が成立し、重慶の国民党が反撃したこと、また枢軸側の勝利が毎日のように伝えられてくる中、日本側にも「今更蔣介石でもあるまい」という雰囲気があったことが影響したという（吉田 1958, pp. 137-143）。

(5) 姜豪の回想録との比較

以上は主に吉田東祐の回想に基づいて事情を整理したが、交渉の相手であった姜豪はこの事態を如何に見ていたか³⁾。姜豪の回想録から検討してみたい。

姜豪の回想録の特徴は、今井武夫の『支那事変の回想』（みすず書房、1964 年）及び小野寺信の妻百合子の『バルト海のほとりにて一武官の妻の大東亜戦争』（共同通信社、1985 年）の中国語版を読んだうえで執筆されている点にある。姜豪は、両著作の「姜豪路線」の内容は、実際よりも誇張して描かれており、姜豪自身は重慶側の密使といった特殊な身分ではなく、あくまで「脇役」に過ぎなかつたとする（姜豪 pp. 1-2）。加えて小野寺著が「姜豪と吳開先・杜月笙が和平会談の準備をした」とする点、今井著が「1939 年 1 月に、小野寺信と姜豪が接触し、国民党組織部副部長吳開先を通じて、CC 系の陳立夫と朱家驥の路線で、和平会談を進める道を開いた」とする点は事実ではないとする（姜豪 p. 181）。また小野寺著が、吉田東祐と姜豪がマカオで会談した際、吉田が姜豪から重慶国民政府の対日和平条件に関する報告を受け取ったとする点についても、吉田との接触は個人の立場によるもので、国民政府の和平条件を提出することなど根本的に不可能と一蹴している。一方で吉田東祐の『二つの国にかける橋』という回想録の存在は、小野寺著が言

3) 姜豪（1908-2008）：江蘇宝山人。1920 代初南洋大学附属中学に入り、大学を卒業。五三〇事件ののち、国民革命軍に参加。1927 年国民党交大学区分部に参加。陳公博が上海で『革命評論』を創刊すると、姜豪もこれに加わり、国民党改組派のメンバーとして、反蔣活動に携わった。1933 年国民党上海市党部監察委員。1937 年 8 月上海市各界抗敵後援会に参加し戦時服務団団長に就任。

及しているため知つてはいるものの、中国語訳がないため、その内容は不明であるとしている（姜豪 p. 201）。

以上の姜豪の主張と日本の二つの回想録との齟齬をどのように考えればよいだろうか。まず、姜豪回想録で描かれる小野寺機関や吉田東祐との関係は、姜豪が小野寺の計らいで釈放された点など、事実関係では吉田東祐の回想とほぼ同じである。両者が戦後は没交渉であったことを考えれば、事実関係については信じるに足ろう。また姜豪は、吉田東祐の通訳の存在など、吉田が触れていない点にも触れている。

次に重慶との直接交渉である。これは双方の主観の問題もあり評価の難しいところである。姜豪が述べるように、あくまでその立場は「脇役」に過ぎなかった、と言うこともできるかもしれない。実際日本側が求めていたのは、姜豪を通じてより有力な政治家を交渉の舞台に出させることであり、姜豪が蒋介石の全権委任状に類するものを持っていなかつたことは、吉田東祐も回想している。

ただ吉田によれば、姜豪は重慶側の最低条件を提示もしており、日本側に残された史料からも、姜豪が重慶国民政府と日本側の橋渡しであったことは間違いない。実際陸軍中央にも姜豪が陳立夫・陳果夫と通じていることは伝えられていた（山田部隊本部）。姜豪は相応の役割を果たしていたのは確かである⁴⁾。

では姜豪は何故日本の二つの回想録の記述を批判したのであろうか。これは中国共産党に対する姜豪の配慮が働いたと考えられる。姜豪が日本側と和平交渉に携わっていた当時、日本側と重慶側が早期に停戦するべき根拠の一つとされたのが、中国共産党の擡頭であった。吉田東祐も中国共産党の拡大については繰り返し警戒感を表明し、重慶側に日本との停戦を求めていた（後述）。このような交渉に、自らが主体的に携わっていたとする記述は、姜豪にとってあまり触れてほしくない部分であったと考えられるのである。姜豪の回想録はこうした点をも意識して読む必要があるだろう。

V 上海での活動

(1) 中国建設青年隊

汪政権成立後、しばらくの間は吉田東祐の動きを確認することはできない。再び吉田東祐の名前が現れるのは、日本の対英米宣戦布告後、1942年3月に上海に成立した中国建設青年隊（以下青年隊）なる団体の常任顧問としてである。

青年隊は「綱領」に、「我等は新中国建設の親衛隊なり」「我等は英米帝国主義の東亜侵略を撃滅す」「我等は中国共産党の徹底的潰滅を期す」「我等は大東亜諸民族の解放戦たる大東亜戦争の必勝を期す」「我等は大東亜民族青年議会の創設を期す」の五箇条を掲げ（吉田 1944a, p. 151）、「中日提携を以て新中国建設を促進し、東方固有文化並に王道精神を

4) 紙幅の関係で、吉田東祐から今井武夫に報告された、直接和平交渉の具体的な中身については別稿で検討する。

発揚し以て、東亜新秩序建設完成を達成」することを目的とする団体であった（吉田 1944a, p. 156）。青年隊は東亜民族音楽大会、拒毒紀念民衆大会や各種座談会の開催、機関誌『中国青年』（後に『新生命』と改題）の発行などをおこなった⁵⁾。吉田東祐が『申報』や機関誌に書いた文章を集めた論文集を最初に刊行したのも青年隊であった。

青年隊は成立に際し、中国復興社なる組織を発展的に解消して成立したものと説明している。中国復興社の詳細は不明だが、日中戦争勃発直後に「五族解放」や「大漢國」樹立を唱え、日本軍とも関係を持っていた張鳴なる人物が、汪政権成立前夜の上海に同名の団体を組織していることが確認できる⁶⁾。張鳴の中国復興社はその後活動を縮小していることを考えると、中国建設青年隊は、登記など実務上の都合で中国復興社を継承する形を取ったのではないかと推測される。

青年隊の代表には顧咸康、指導顧問には市橋岩夫が就任した。両名の履歴は不明だが、市橋は「獨力で中国建設青年隊を建設した人で」、吉田の文章を「要路の当局及び各方面的有志に配布」することを提案したという（吉田 1944a, p. 7）。青年隊の顧問には、上海市商会理事長の袁履登、秘密結社青幫や紅卍字会と関係のある徐鉄珊、頭山満の三男頭山秀三、「支那通」軍人として知られる坂西利八郎、右翼活動家の岩田愛之助らが名前を連ねた。また講演や雑誌用紙配給などで軍報道部や日本大使館から支援があった（吉田 1944a, pp. 160-171）。

（2）上海における吉田東祐の人脈

吉田東祐と日本軍人との関係は上述したが、この他に如何なる面々が吉田東祐と交流を持っていたのであろうか。ここでは吉田の論文集の中でも最も分量があり、また序文・題字が多く寄せられている『第二輯 日華問題の全面的解決の為めに』（中国建設青年隊、1944 年）を手掛かりに検討したい。

同書に序文を寄せている人物には、広田洋二（在上海日本大使館情報課長）・陳友仁（武漢国民政府外交部長）・陳彬龢（申報社長）・張一鵬（北京政府司法部次長・上海律師公会会長）が確認できる。また周仏海（汪政権財政部長）・褚民誼（汪政権外交部長）・袁履登は題字を寄せている。このうち陳友仁・張一鵬・陳彬龢・周仏海との関係については吉田も回想している。特に陳友仁と張一鵬は、以下のように吉田にも大きな影響を与えた。

陳友仁

吉田東祐が陳友仁と知り合ったのは 1942 年 4 月だった。当時日本軍は陳友仁に汪政権への参加を求めていたが、その交渉のため派遣されたのが吉田だった。陳は通訳を介さず直接英語で話の出来る日本人に喜んだといい、その後も日本人との会見では吉田が通訳を務めた。吉田は「日本語秘書のような格好で三年間彼〔=陳友仁〕につかえ、結局彼の臨終をみとり、彼の棺をかつぐことになった。おそらく私は彼から中国革命の実際にについて

5) 『中国青年』『新生命』の主張については別稿で検討したい。

6) 張鳴については（閔 2017a）参照。

直接教えをうけた最初にして最後の弟子だった」と、陳友仁の影響が大きかったとする。

陳友仁は「日本が中国の独立と自由をほんとうに承認するならば、いつでも喜んで協力する」と明言していたが、結局汪政権に参加することはなかった。陳友仁の発言は「あまりにも強硬なのでしばしば〔吉田が〕直訳を躊躇」するほどだったが、その一端は日本に対する次の発言に端的に表れている。

中国の政府は中国人が自分で選ぶべきものです。外国人である貴方方の選ぶべきものではありません。現在中国には二つの政府があります。一つは南京の汪精衛政権、もう一つは重慶の蒋介石政権です。貴方方は中国人に、この二つの政府のどちらが中国人によって選ばれた政府であるかを自由にものを考えられる中国の民衆に訪ねてごらん下さい。私は個人としては蒋介石とずっと闘争してきました。しかし、現在この時、この二つの政権のどれが中国の本当の政府かときかれたら、即座に、はなはだ遺憾ながら、やはり蒋介石政府こそ中国の政府だと言わざるを得ないです（吉田 1956）。

陳友仁は吉田に対し「抗戦地区中国人一般の日本に対する率直なる感情を語り、日本の政策の向ふ可き方向を懇切に指示し」、後述する吉田東祐の議論にも影響を与えた（吉田 1944a, p. 23）。

張一鵬

張一鵬は北京政府で司法部次長も務めた法曹界の長老で、占領下の上海では上海市民協会理事等を務めた。張は清廉で知られ、1943年12月には請われて汪政権の司法行政部長に就任し、腐敗の横行した政権の中で「偉観」を呈した。吉田は「墨子論」（1944年1月9日）の中で張一鵬を「賢者」と述べ次のように称賛している。

……今日幸にして南京政府は一人の賢者を挙げて司法行政部長たらしめた、即ち張一鵬先生だ。齡七十近く何時も木綿の色あせた支那服を着、いつも徒歩か、三等電車で通つてくる司法行政部長は蓋し南京政府の一偉観であらう。私はかゝる勤僕己れを持つ司法〔行政〕部長の存在そのものが既に現政治に対するよき刺戟であると信じてゐる。（中略）上海市民は今回先生の司法行政部長就職に対して異常な期待をもつてゐる（吉田 1944b, pp. 10-11）。

一方の張一鵬も吉田を「中国文壇の宿将」と称し、その議論は日中両民族の苦痛を披瀝するものと評価した。

〔吉田〕先生はよく中国の現実を把握し、将来を洞察し徒らに強がりの陋見を抑制し極めて冷静に中日両国の葛藤を斬断してゐる。もっと重要なことは先生が両国民族の内心の苦痛を披瀝し少しも憚かるところなく説明を加へてゐることである。（中略）それ故先生の言論が新聞雑誌に発表される毎に、それを閲読する民衆は常に先生の言論が真に全中国人の言はんとして敢へて言い得ず、説かんとして敢へて説き得ざる輿論を代表してゐることに感嘆するのである（吉田 1944a, p. 14）。

VI 『申報』を中心とした言論活動

吉田が『申報』に執筆するきっかけは、岩井英一（上海総領事）の招宴を通じて申報社長の陳彬龢の知遇を得たことにある⁷⁾。1943年3月、陳彬龢は吉田を訪れ、「あなたの御意見はよくきいている、なんでもいいから、あなたの感じた通りに書いてもらいたい」と執筆を要請した。以後吉田は『申報』日曜論壇等を舞台に、「時弊について書きまくった」（吉田 1958, pp. 148-149, 吉田 1944a, p. 22）。筆者が整理した限りでは、吉田の論稿は50篇以上あり、それは1943年1月から1945年7月までの二年半に集中している（文末の表を参照）。

吉田の評論は検閲を意識して「間接的表現法」を用いることが多かった（吉田 1958, p. 151）。例えば「日本に好意を持つてゐる某中国要人が曾つて私に次のやうに述べた」と前置きをした上で、日本が犯した3つの誤謬、1.「中国国民の力量に頼らず一部特殊の政治力に頼つて南京政府を組織したこと」、2.「日支事変を解決せずして大東亜戦争を開始したこと」、3.「治外法権其の他を南京政府に返還し中国国民より感謝される機会を永久に失ったこと」、を列挙するなどは、その好例である（吉田 1944a, p. 5）。しかし、文章が「中国人を対象にして、華文で書かれていたので、検閲にも相当の目こぼしが」あり、「この間隙を利用して、占領下の中国民衆がなんで一番苦しんでいるかをかなり大胆にとりあげた」という（鹿島 p. 97）。

吉田が取り上げたテーマは多岐に亘るが、以下、6点から事例を挙げて検討する。

(1) 占領地政策について

吉田東祐の議論の根底には、それまでの占領地政策に対する不満があった。吉田は論文集の「序文」（1943年10月10日）で、「日頃から考へてゐた」こととして次のように述べている。

従来の対華文化宣伝を見ると殆ど「同文同種」であるとか「兄弟の国」であるとかと言ふ所謂「和平八股文」を一步も出ないのである。抗戦地区の中国人がこんな生ぬるい理論で説得出来るものなら中日事変などは元来起るはずのものではない。彼等を説得するには日本人に聞きづらい真実も言はなければならない。又日本の欠点も認めなければ対手の欠点を認めさすわけにはゆかない。そして大胆に中国人の民族的 requirements を取り上げ彼等の民族的苦悶に答へ得るやうな対支文化政策でなければならない（吉田 1944a, p. 22）。

1943年に租界返還や汪政権への権限移譲などを柱にした日本の新政策が始まるが、これについてもその意義をより深く理解することを日本人に求めている。吉田は「日本人は「政策転換」の意義を理論的には知つてゐたが「感情的」にはまだまだよく理解して」いないとする。そして太平洋の戦線で多くの兵士が国家のために死んでいく現状に触れ、「対

7) 陳彬龢の不思議な経歴については、蔡登山に詳しい。

支文化戦線からも従来と異つた意味に於て戦死者の一人や二人出ても已むを得ない」と述べ、対中政策の抜本的転換の必要性を示した（吉田 1944a, p. 24）。

言論統制を批判した「思想対策論」（1944年2月13日）では、「今日抗戦地区には「抗戦八股文」が跋扈し、和平地区には「和平八股文」が跋扈してゐるのは、いづれも言論統制の行き過ぎた結果」であるとし、「言論の統制が言論を萎縮させるやうなことになつては我々の戦争理論が発展」できないと述べている（吉田 1944b, p. 32）。吉田の議論は、この「和平八股文」を大きく乗越えることを目指して展開されたのである。

（2）重慶国民政府への期待と中国共産党擡頭への警戒

吉田は「中日問題全面的解決の可能性」（1943年7月3日）の中で、「現在の重慶政権は親日反共派と欧米派の中共に対する聯合陣線」で、彼らにとって「日本も敵であるが、中共も亦た彼等のヘグモニーを脅かす敵」であると指摘した。そして「中共は階級関係の対立に基づく本質的な敵」であるのに対し、日本は戦争状態がなくなれば「本質的な妥協のあり得る」存在であるのだから、重慶と日本は早期に停戦するべきと述べた。

とりわけ吉田が期待したのは重慶国民政府内の親日派であった。吉田は「日本人は親日派の眞の意義を理解してゐない」とし、「親日派とは中国よりも日本を愛する人々ではなく、亜細亜に於ける日本と中国との地域的関係を重視し、中国の自主独立は日本と協調することなしには不可能であると考へる思想的傾向」と喝破する。そして、「重慶政権の中に於て親日反共派勢力の占める比重が著しく大なる今日」、親日派の帰趨に「日支和平問題解決の焦点がある」と説明した（吉田 1944a, pp. 21-23）。

中国共産党の勢力拡大への危機感も繰り返し表明された。「重慶の命運—蒋介石の「中国の命運」に答ふ」（1943年11月18日）は、日本との徹底抗戦にこだわれば、結局共産党に政権を渡すことになるとして次のように警告した。

……今日重慶国民党の当面してゐる重大問題は日本と妥協するか、中共に政権を渡すかの二者択一であるにも拘わらず「中国の命運」は此の命題に対する回答を故意に避け、抗戦最後の勝利と言ふ理想の砂中に頭をつつ込むことによつて彼等が現実に当面しつつある国民党分裂の危険を故意に見ざらんとしてゐる（中略）若し重慶が日本に和平を求むれば、それが中国の命運に如何に必要であらうとも、中共はそれに反対せざるを得ない立場に置かれてゐる。それ故重慶政府が若し日本と妥協する場合には国共両国の休戦条約は直ちに終了し、公然たる闘争状態が展開されることは勿論である。中共は重慶をして日本と抗戦を継続せしむる督戦隊である。（中略）之が国共合作の上に立つた「重慶の命運」である（吉田 1944a, pp. 133-134, 144-145）。

さらにこの問題を重慶中枢が理解出来なければ重慶が直面する命運として3点、1. もし欧洲でソ連が勝利を得れば、中共の勢力は最早や如何ともなし難い、2. 国民党の内部では、反共和平派の勢力は益々大きくなり、蒋介石も従来のように超然的態度をとれなくなる、3. 結局国民党は日本に赴くものと中共と共に抗戦を続けるものに分裂し、後者は中共の抗戦指導力に服さなければならなくなる、を指摘した（吉田 1944a, pp. 149-150）。

「国共関係の再認識」（1944年1月27日）では、「重慶に於ける反共的傾向の強化は、勿論重慶をして日本側に接近せしめる一モメントで（中略）重慶側が武力剿共を開始すると言ふことは、重慶と日本との間に妥協の成立したことを意味する」と指摘し、国共関係が日本との和平に密接に關係することを繰返した（吉田 1944b, p. 94）。

（3）中国の自主独立・領土保全

吉田は中国民衆の要求は極めて簡単で、これは中国の自主独立であるとし、先述の議論「中日問題全面的解決の可能性」でも、「日本人は此の点を理解し中国人の愛国心を同じ亞細亞の同胞として力強く感じなければならない」と述べた。汪政権への権限移譲を核とした日本の新政策に疑いを持つ中国人への接し方についても、「日本は直ちに腹を立ててはいけない。それに対する道は唯黙々と誠意を実行するのみ」と語った。また「事実上中国を領土化するか否かを疑つてゐる（中略）重慶側の中国人」に対しては、日本が「南洋だけで充分領土には食傷してゐる」点、また日本が「四億の中国人の強力なる協力を必要」としている点を挙げて、懸念には及ばないとした（吉田 1944a, pp. 25-26）。

同様の議論は他にも確認される。例えば「類は教あるに無し」（1944年1月16日）は、「日本が若し中国の民族的自尊心に敏感でないならば中国の青年を何時までもその盲目的民族的敵愾心から解放することが出来ず、結局日支両国の命運を誤る」と述べている（吉田 1944b, p. 22）。

（4）中国知識階級の重視

吉田も当時の例に漏れず、中国の知識階級の動向を重視したが、同時にその支持を得ることの難しさにも自覺的だった。例えば「日本の対支文化政策と中国知識階級」（1943年3月4日）は、上海で発行されていた日本語紙『大陸新報』社論の「我国の断行した政策転換と関聯して中国知識階級は一大センセーションを受け、真剣に日本と協力せんとする運動が抬頭した」とする見解が「日本人の希望的観察ではないか」と述べる。

その根拠として吉田が取り上げたのが、同じ『大陸新報』に掲載された日中作家の対談である。吉田は中国人作家の陶晶孫（陶熾孫）が林房雄に対して、「口先だけでは解らない、実行に移さなければ駄目だ、だから、文学者がいくら日華親善を書いても書く程疑はれる」と語ったことに言及し、「陶熾孫は和平地区内の文学者である。その人にして此の言葉があるのであるから、重慶側地区内の中国インテリゲンチヤの対日感情は推して知る可き」と述べる。そして「日本人は中国の知識階級が現在真剣に日本に協力しやうとしてゐるなどと安心しきつてゐてはいけない。私は日本の中国の知識階級に対する印象が尚極めて悪いと云ふ前提の下に立ち改めて之を思想的に如何に獲得し、如何に大東亜戦争に動員せしむ可きかと言ふ見地から対支文化政策の再出発を行ふ可き」と結論づけた（吉田 1944a, pp. 27-29）。

吉田の議論は、時に男女関係や性の話題を引き合いに出す点にも特徴がある。中国の知識人を「恋愛の経験をつんだ年増女」と比喩する、その名も「恋愛論の如く」（1943年12

月 26 日) では、日中関係を男女の関係になぞらえて議論が展開される。

中国の知識階級を手に入れるためには日本は「かりそめの恋」を中国にしかけてはいけない。対手の人格を認め性慾の対象としてではなく、一生の伴侶とするつもりで、端的に言へば妾とするつもりではなく正妻とするつもりで愛をさゝやかなければいけない。この点に於て今まで英米にだまされ続けてきた中国の知識階級は寧ろ恋愛の経験をつんだ年増女に似てゐる。(吉田 1944b, p. 16)。

この議論は比較の妙もあってか周仏海の注目するところとなる(後述)。

(5) 汪政権への眼差し

汪政権には占領地の政権という側面と同時に、日本との和平の成果を示すことで、重慶国民政府を切り崩す役割も求められていた。吉田もこれを意識して、例えば「阿片戦争は現在戦はれてゐる」(1943年6月11日)では、「政府〔=汪政権〕に対する強大なる中国民衆の支持を獲得する」ためには、「阿片吸飲者の最後の一人を絶滅し、和平地区の人民生活を安定し「途落ちたるを拾はず」と言ふ境地を実現すれば、如何に頑強な抗日意識に養はれた中国知識階級と雖も、その事実の前に南京政府を支持せざるを得」なくなると述べた。そして「蒋介石が最も怖れてゐる」ことは、「重慶を支持してゐる知識階級が重慶を支持しなくな」ことであると結んだ(吉田 1944a, p. 68)。

しかし一方で吉田は汪政権へ厳しい眼差しも向けていた。戦後の回想でも「彼ら〔=汪政権〕の毎日は日本人を宴会に招待するのが主な仕事だった。国民に対する政治はかけらさえあつたかどうかも疑問(吉田 1958, p. 145)」と手厳しい。

たださすがの吉田も、当時汪政権を直接批判する事は難しかったようである。例えば「國家興衰の道」(1943年5月3日)では、「Anglo-Saxon Contagion」なる用語を使うことで、汪政権への筆鋒を和らげている。同文では冒頭、『申報』社論が「政府の役員たるものは最高領袖より下級幹部に至る迄各員各自全国人民の模範となり廉潔整肅の風気を樹立せよ」と論じたことを受け、「官僚が一人一人尽く人民の模範となり「廉潔整肅の政治風気を樹立する」熱意を持たなければならぬ」と述べる。そして続く部分で、「然し現実に於ては政府役員にして Anglo-Saxon Contagion に犯されてゐる者が絶対にないとは断言出来ない」と表現するのである。

では「Anglo-Saxon Contagion (アングロ・サクソンの伝染)」とは何か。それは後半部分にある、「囤積〔=買占め〕、阿片吸飲賭博等は尽くアングロ・サクソン的文化の所産である」という部分で明確になる。買占めやアヘンの吸飲といった悪い習慣は、「アングロ・サクソン」に由来する、というのである。

「アングロ・サクソン」はイギリス・アメリカを指す用語で、日本の対米英開戦後は、同じ欧米諸国でも枢軸国であるドイツやフランスと区別する上で持ち出された概念である。このため日本や汪政権の当局も「アングロ・サクソン」への批判は積極的だった。吉田はそれを利用して、「アングロ・サクソン」を批判するという形で、実質的には汪政権の役人腐敗を批判し、「先づ容易なる有形の害悪の肅清より始めよ」と献言したのである(吉

田 1944a, p. 70, pp. 74-76)。

1943年8月、日本は租界を返還したが、この問題を取り上げた「租界返還に対する若干の意見—眞実を語る」(1943年7月18日)でも汪政権への批判が垣間見る。そこでは、まず「南京政府が今日若し上海の住民を心服させることができれば、明日は全中国を心服させることも困難ではない」とする。しかし続く部分で、租界返還は、汪政権・上海市民・日本に課せられた「苛酷なる試験」であり、実際は簡単でないとする。そして「南京政府の中にも上海租界の返還に有頂天になつてゐる人々があるやう」だが、「租界返還に対し唯喜ぶことのみを知りて悲壯なる決意を以て臨む可き重大事なることを知らざるものゝあることは誠に遺憾」と述べ、暗に汪政権を批判する(吉田 1944a, pp. 84-85)。

上海の役人の腐敗を糾弾した「法の神聖」(1943年12月12日)では、「制服を着た人々〔=役人〕」が「小商人から賄賂を強請してゐる光景は蓋し世界の文明国家にはめつたに見られぬ偉觀」と皮肉を述べ、法律を「道徳を破壊する道具として用ひれば、その国の運命は危い」と警鐘を鳴らす。さらに「此の事を或る高官に話したところ」、その高官が「中国に於て少し位の賄賂を気にしてゐては神経衰弱になる」と言ったので、返す刀で「私は神経衰弱かもしれないが、貴下は痴呆症である」と答えた、という落ちまで付けている(吉田 1944b, pp. 2-3)。同様の役人批判は、「進歩的貧官汚吏」(1944年4月13日)でも展開された(吉田 1944b, p. 68)。

読者からの手紙を紹介するという形で、政権批判をする方法もとられた。「封印されたる苦悶」(1944年3月20日)では、「我々は現在完全に共和国になつた、御覽の通り「共」と「和」と「国」の三つの軍隊の支配する国になつて了つた」という読者の声を伝える。「共」「和」「国」はそれぞれ、共産党、和平軍〔=汪政権軍〕、国府〔=重慶国民政府〕を指している。そして「××軍」は「日本軍が居なければ、丁度乳母を失つた赤子のやうに容易に人に抱き去られ」る存在で、「その仕事と言ふのは唯その地方から金をとることだけ」という。さらに「××軍は奪つて食ひ、新四軍は騙して食ひ、老百姓〔=庶民〕は食ふに食へない」という田舎の人の言葉を伝えている(吉田 1944b, pp. 74-76)。文脈から「××軍」が「和平軍」であることは容易に想像できる。

吉田は、「眞実はどんな形ででもいい、伝えなければならないと思った」と回想するように(吉田 1958, p. 151)、様々な方法を駆使して、占領地から汪政権の問題を指弾し続けたのである。

(6) 戦後世界と中国への眼差し

戦争中でありながら戦後の世界と中国についても積極的に議論したのも吉田の特徴である。先述の「重慶の命運—蒋介石の「中国の命運」に答ふ」では、南米諸国は、「形式的には立派な「自主独立」の国家である」ものの、「之等の国家が現在「自主独立」の主権により自己の政策を決定してゐるであらうか」と疑問を投げかけ、実際には「之等の国々の一舉一動がウォール街の号令によつて動かされて」いるとする。ここでのウォール街はアメリカ経済とほぼ同義と考えてよいだろう。そして、同じく「経済的に後れた亜細亜の

諸国がブルジョア民主主義革命を完成しても、それだけでその国が英米資本主義の世界支配から脱することが出来るなどと考へるのは稍々時代錯誤」と述べた。

当時重慶国民政府が唱えていた戦後の「世界四大強国」という言葉についても、「凡そ近代工業に必要な物資について英米蘇三国と比較にならぬ中国が如何なる厚顔を以て自らを「世界四大強国」と言ふか」と非難した（吉田 1944a, pp. 146-147）。

「日本の反省」（1943年12月17日）でも、カイロ会談では認された米国の「戦後計画」は「米国の商品を買ふ「世界」を建設」することを目的としており、もし「日本が亜細亜の運命を背負つた此の戦争に万一破れることがあれば中国も亦た米国金融資本の支配下に置かれること」になるとする。そして、仮に中国が「亜細亜の運命が自国にかゝつてゐることを自覚し、米国の金融資本の魔手と戦はねばならぬと主張」しても、その時には「亜細亜唯一の武力——日本——はなく、中国は独力を以て英米に当らなければならない」と述べる（吉田 1944b, pp. 104-105）。

こうした戦後の見通しは、吉田東祐が直接交渉の相手とした重慶政府関係者も共有するものであった。1942年12月、江蘇省溧陽に近い山丫橋で吳紹澍（三民主義青年団上海支部長兼江蘇省監察使）と会見した吉田は、吳から次のような発言があったとする。

中国は国民の感情としては日本の惨敗を欲しているが、政府の理性としては日本の破滅は欲していない。アジアにおける日本の実力が破壊され、中国だけが残るとすれば、今後の世界政治に於けるアジアの発言権は失われ、同時にソ連及び中共の進出をばばむ力も減少する。これは中国の前途に重大な関係があることだ（吉田 1958, p. 181）。

このように吉田の議論は重慶側とも問題関心を同じくする部分が少なくなかった。このため次に述べるように占領地区を超えて広く注目されるようになったと考えられる。

（7）中国人からの反響

吉田東祐の議論への反響は大きかった。その社論が載った『申報』は「いつも売りきれ」で（吉田 1958, p. 155），吉田は「殆ど毎日四五通づつ中国の読者から激励や反駁の手紙を受け取つた」（吉田 1944a, p. 23）。また論文集は「三千部を発行するや二三ヶ月中に忽ち売り切れ」た（吉田 1944b, 陳彬龢「序文」）。

当時慶應義塾大学に留学していた周幼海（周仏海子息）も、吉田の「中日問題全面解決の可能性」は「我が国人就中京滬〔南京・上海〕一帯の人は非常に熟知して」おり、「これが中国人の口から言ひ出されしものならば何等の不思議はないが、日本人の口から説かれたのであるから、我々は之を重視せざるを得ない」と述べている（吉田 1944a 卷末「本書の中国青年層に対する反響」）。

反響は抗日地区からも寄せられた。重慶の『大公報』が「日本人のなかにも日本の政策を批判するものがあらわれた」と宣伝の材料にしたほか（吉田 1958, p. 155），浙江省麗水で発行されていた『東南日報』は、阿匹の「斥吉田東祐」という文章を掲載した。

この文章は吉田東祐の文章を多く引用し、それに逐次反駁を加えるという筆法で「中国通」吉田東祐の言行不一致を批判した（『東南日報』）。しかし言行が一致していない日本

人の議論など、当時いくらでもあった筈である。あえて吉田東祐の議論を取り上げ、詳細に批判を加えたことは、図らずも重慶側がその影響力を無視できないものと警戒していたことを伝えている。

同じ抗日の立場でも、共産党系の人々は吉田の議論を謀略と考えた。吉田は「中共系の人々は、汪政府のお膝もとでこんな文章が発表されるということは、蔣との「全面和平」を促進する日本の謀略にちがいないとみた」とし、「従ってこの方面からは再三脅迫状がまいこんだ」という（吉田 1958, pp. 155-156）。

このように吉田の議論には激励とともに反駁もあったが、吉田への批判や反駁は、吉田の議論が中国の現状からかけ離れていたため、というよりは、むしろ吉田の議論が、当時の中国が抱える問題の核心を突いていたため、と考えられる。吉田は「中国問題に関する限り中国の読者は最もよき判定者」であるものの、寄せられた批判のほとんどは的外れとし、『日本の反省と中国の革新』中国版への著者序文（1944年5月1日）で、次のように述べる。

一部の中国人の読者は此の言論集の著者が日本人であると言ふことが気に食はないであらう。そして日本人の書いたものであるから此の言論が一見して正しいように見へても怪しいものであると結論する。之等の読者の気持ちはよく判る、之に対して私はかう答へたい。（中略）今私がたとへ中国人を誤魔化すために文章を書いても、その文章が客観的に見て真理であれば、それとして文化的価値がある（中略）私は此の言論集で述べてゐることを客観的に批判し、それが正確ならば正確、不正確ならば不正確と批評して貰ひたいのである、日本人の書いたものだから不正確、中国人の書いたものだから正確であると言ふやうな民族主義は今時流行らない（吉田 1944b, pp. 112-113）。

こうした吉田を周仏海が支援したことは興味深い。周仏海は汪政権で財政部長を務めた実力者だが、水面下で重慶側との連絡を取り続けていたことでも知られている。吉田は周仏海が吉田の「恋愛論の如く」に非常に関心を持ち、陳彬龢を介して連絡をとってきたとし、次のように回想している。

周仏海に会つたのはそれから二三日後のことだ。^{ママ}合つてみると彼は私が申報に書いたものはよく読んでいてくれて、話題はそれからそれえとつきなかつた。私は自分の文章でずっと南京政府を批判していたので何となくうしろめたく自然に言葉少なくなつた。彼はそれに反しお酒も手伝つて非常に多弁だつた。初対面の私に向つて重慶との全面和平について語つた。（中略）それからまた二三日たつて周仏海の奥さんの弟さんとかいう楊惺華という人が私の家に来られて、これは周さんからのものだといつてかなりな金額の小切手を出し、これから貴方のお仕事をお助けするため毎月この金額を贈らせて貰いますと言つてそのまま帰つて了つた。以来私は終戦まで引続き彼の援助を受けて居た。（中略）私が華文の「重慶政権の分析」を書いたときも、氏は人を通じて「奮和運之呼声作青年之領導」という題字を贈つてくれた。こういうわけで周仏海氏とは生前一度しかあわなかつたに拘らず私の数少ない知己の一人であつたし、

私も亦た彼の政治家としての行き方には賛成は出来なかつたが、彼の人間としての善意は最もよく理解している一人だと思つている（吉田 1953, pp. 3-4・pp. 9-11）。

当時重慶と秘密裏に連絡を取つていた周仏海にとって、吉田の議論は自身の活動に棹差すものであった。吉田を援助し続けた背景には、こうした周の思惑も見えてくる。

以上のような言論活動の一方、吉田は 1942 年末及び 1944 年から 1945 年にかけて重慶側との交渉に携わつた（吉田 1958, p. 157・182）。日本の敗戦前夜には近衛文麿に面会し、その親書を代筆し重慶に手渡す段階にもなつていた。吉田は「要は蔣と直接会つて話したい」という、近衛の意志さえ伝えられればよいのだと思ったので、簡明な文体をえらんだ」という（吉田 1958, pp. 198-205）。しかしこれが実現する前に日本は敗戦を迎えた、汪政権も解散したのである。

VII 小 結

以上本稿では、日中戦争末期の中国占領地で積極的に議論を発表した吉田東祐の活動と議論を手掛かりに、当該時期における中国占領地を中心とした言論空間の実態に迫つた。吉田東祐自身は中国人ではなかつたものの、自身の共産党員としての経験や、抗日救国会メンバーとの関わり、さらに日本軍を背景とした重慶国民政府との直接交渉などを通して、中国人の意識を幅広く知る立場にあつた。陳友仁・張一鵬・陳彬龢の他、上海経済界の実力者である聞蘭亭・林康候・袁履登も様々な問題で吉田を啓発したといい、吉田も自身の「労作は全く之等中国の友人との中日合作」とする（吉田 1944a, p. 23）。

こうした背景を持って展開された吉田の議論は、当時占領地で自由な言論活動が制限されていた中国人の声を代弁するものとして、占領地はもちろん、抗日側の中国人からも注目された。吉田は秘密裏に重慶との直接交渉に携わつていたが、そうした最前線で得られた知見は、言論活動という形をとつて表面では占領地と抗戦地域を繋ぐ役割を果たしていたのである。

吉田は、当時中国人が諂いを起した際に、「全是中国（我々はみな中国人である）」という言葉で、場が収まつたことを回想しているが（鹿島 p. 105），吉田の議論はまさにこの言葉に象徴されるように占領地・抗戦地域の別を超えて、中国人の琴線に触れるものだったのである。吉田の議論を通して、我々は当時の中国人の汪政権に対する思いや、中国の将来に対する意識を間接的に知ることが出来るのである。

最後にその後の吉田東祐の動向についても触れておきたい。1945 年 9 月、かつて吉田の直接交渉の相手方であった姜豪と楊健威（鵬搏）が、上海北四川路の日僑管理所に吉田を訪れた。吉田は中国政府の待遇に感謝するとともに、和平交渉が成功していれば、日本はこうした状況になることはなかつたと悔しがつた。そして最後に、帰国後は必ず日中民間友好の活動に従事すると話した。当時姜豪も国民党中央に対して、中日民間友好活動の展開を建議していた。しかし中央からの反応は無く、以後両者が連絡を取ることは無かつた（姜豪 p. 201）。

1946年に帰国した吉田東祐は、1948年に愛知大学理事に就任し同大学国際問題研究所の中国部長を兼任した。ただ吉田東祐はそのまま学術界に移ったわけではない。

日本が国際社会に復帰する時期、時の内閣総理大臣吉田茂は「中国本土に価値ある伝手を持っているかなり多数の日本人は、多くの地域での活動に利用することができる」（1952年4月28日、駐日大使マーフィーに対する発言）との認識を持ち、中国人を共産主義から切り離すために、日本が主体的に関わることを構想していた。その際吉田東祐も辰巳栄一（元陸軍中将・英國大使館附武官輔佐官）の下で諜報員を務め、また内調（内閣総理大臣官房調査室、1952年4月9日成立）とCIAとの共同作戦に吉田東祐を起用する動きがあったのである（井上正也）。この動きは吉田茂内閣の退陣で収束するが、戦中の中国での吉田東祐の活動経験は、戦後しばらくの間は現実政治と関わりを持ち続けていたのである。

1956年、吉田は國立館大学に移ったが、その後「民主派教授としてクビになり、裁判闘争をして」勝利した。中国への関心は生涯持ち続け、航空便で届けられる『人民日報』の他、香港の中国紙を三紙購読していたという。思想の科学研究会を通じて吉田と交流のあった渡辺一衛は、吉田について「客観的には日本の占領政策の一翼を担った人間であったことは否めない。しかし戦後の鹿島さんの行動は、鹿島さんが徹底した民主主義者であることを示している」とする。1980年6月、吉田は75歳で逝去した（渡辺一衛）。

（せき ともひで・日本学術振興会特別研究員）

参考文献

未刊行史料

- ・山田部隊本部『中支派遣軍対共思想工作実施報告（昭和14年7月10日現在）』、昭和14（1939）年「陸支受大日記 第48号」防衛省防衛研究所。

新聞

中国紙（題名ピンイン順）

- ・『東南日報』（麗水版）1944年7月28日、4版 阿匹「斥吉田東祐」。
- ・『申報』

日本紙（発行日順）

- ・『東京朝日新聞』1932年9月22日、7面「飛行機を利用して空の赤化を策す 恐るべき陰謀暴露し 第一飛行学校長等五名検挙」。
- ・『東京朝日新聞』1932年9月23日夕刊、2面「軍需工場の赤化を計る共産党軍事委員会 鹿島は同委員会の重要人物 上田校長は釈放さる」。
- ・『東京朝日新聞』1935年7月17日、11面「再々建の暗躍 非常時の波を潜りまたも共産党 米国を通じて指令を受け従来の連絡を一変」。
- ・『東京朝日新聞』1936年8月2日、11面「新人クラブ一味“人民戦線”に狂奔 治維法で近く送局」。
- ・『東京朝日新聞』1936年9月21日、11面「右翼の手を通じ赤の資金獲得 左翼検挙一段落」。

刊行史料

中国語（編著者名ピンイン順）

- ・蔡登山『叛国者与親日文人』独立作家, 2015年。
- ・姜豪『“和談密使”回想録』上海書店出版社, 1998年。
- ・楊天石「抗戦期間日華秘密談判中の“姜豪工作”」『近代史研究』2007年第1期。

日本語（編著者名あいうえお順）

- ・維新政府概史編纂委員会編『中華民国維新政府概史』行政院宣伝局, 1940年。
- ・井上正也「吉田茂の中国「逆浸透」構想—对中国インテリジェンスをめぐって, 一九五二—一九五四年」『国際政治』151号, 2008年3月。
- ・岡部伸『消えたヤルタ密約緊急電—情報士官・小野寺信の孤独な戦い』新潮選書, 2012年。
- ・鹿島宗二郎〔吉田東祐〕『中国のことばとこころ』至誠堂, 1966年。
- ・木戸日記研究会・日本近代史料研究会『林秀澄氏談話速記録』II・III, 1976年。
- ・関智英(2013)「日中戦争時期中国占領地における将来構想—中華民国維新政府指導層の時局観」『史学雑誌』122編11号。
- ・関智英(2016a)「日中道義問答—日米開戦後、「道義的生命力」を巡る占領地中国知識人の議論」, 伊東貴之編『「心身／身心」と環境の哲学—東アジアの伝統思想を媒介に考える』汲古書院。
- ・関智英(2016b)「大使館の人々—汪政権駐日使領館官員履歴」, 相原佳之・尾形洋一・平野健一郎編『東洋文庫藏汪精衛政権駐日大使館文書目録』東洋文庫。
- ・関智英(2017a)「日中開戦前後の中国将来構想—張鳴の「五族解放」「大漢国」論」, 愛知大学国際問題研究所編『対日協力政権とその周辺—自主・協力・抵抗』あるむ。
- ・関智英(2017b)「戦前戦後を繋ぐ思想—政論家としての胡蘭成」『中国—社会と文化』32号(掲載予定)。
- ・中村義他編『近代日中関係史人名辞典』東京堂出版, 2010年。
- ・吉田東祐(1944a)『第二輯 日華問題の全面的解決の為めに』中国建設青年隊。
＊本書は1943年刊行の第一輯の増補版。
- ・吉田東祐(1944b)『日本の反省と中国の革新』申報社。
- ・吉田東祐(1945)『重慶政権の分析』中国建設青年隊。
- ・吉田東祐(1949)『上海無辺』中央公論社。
- ・吉田東祐(1953)「序にかえて」, 同『周仏海日記—中日戦争の裏面史』建民社。
- ・吉田東祐(1956)「わが師陳友仁先生の思い出」, 同『民衆の生活から見た中共』東洋書館。
- ・吉田東祐(1958)『二つの国にかける橋』東京ライフ社。
- ・渡辺一衛「鹿島宗二郎さんのこと」『思想の科学』第6次, 122号, 1980年9月。

【表】吉田東祐論文一覧（戦時期）

年	月	日	論文名	出典
1943	1	31	中国参戦和日本对中国觀的改变	『中国青年』1卷6期、1943年
1943	3	4	日本の対支文化政策と中国知識階級	『日華問題の全面的解決の為めに(第二輯)』
1943	4	15	論物貨問題的嚴重性	『申報』
1943	4	24	阿片戦争は現在戦はれてゐる	『日華問題の全面的解決の為めに(第二輯)』
1943	4	27	鴉片戦争的新意義	『申報』
1943	5	3	国家興衰の道	『日華問題の全面的解決の為めに(第二輯)』
1943	5	7	国家興衰之道	『申報』
1943	5	13	日本之対華文化政策与中国知識階級	『申報月刊』復刊1卷3号
1943	5	13	中国知識階級の日和見主義	『日華問題の全面的解決の為めに(第二輯)』
1943	5	16	中国知識階級的騎牆主義	『申報』
1943	5	20	二種の親日派	『日華問題の全面的解決の為めに(第二輯)』
1943	5	25	両種親日派	『申報』
1943	5	29	日支事変解決の曙光	『日華問題の全面的解決の為めに(第二輯)』
1943	6	2	解決中日事変之曙光	『申報』
1943	6	11	中日事変の性格の変化	『日華問題の全面的解決の為めに(第二輯)』
1943	6	11	眞の「日本通」と「支那通」の言葉	『日華問題の全面的解決の為めに(第二輯)』
1943	6	13	真正日本通与「中国通」的話	『申報』
1943	6	21	相手の心になれ	『日華問題の全面的解決の為めに(第二輯)』
1943	6	22	怎様諒解對方心理	『申報』
1943	7	3	中日問題全面解決的可能性	『申報月刊』復刊1卷7期、1943年
1943	7	3	中日問題全面的解決の可能性	『日華問題の全面的解決の為めに(第二輯)』
1943	7	8	中日事変性格之変化	『太平洋週報』1卷72期、1943年7月8日
1943	7	18	租界返還に対する若干の意見—眞実を語る	『日華問題の全面的解決の為めに(第二輯)』
1943	7	30	心の要塞	『日華問題の全面的解決の為めに(第二輯)』
1943	8	1	対於交還租界的幾個意見	『申報』／『自由評論』1卷2期、1943年
1943	8	2	心理長城	『申報』
1943	8	7	言葉の政治性	『日華問題の全面的解決の為めに(第二輯)』
1943	8	8	交還租界的眞意	『太平洋週報』1卷76期、1943年8月8日
1943	8	20	宴会	『申報』
1943	8	20	宴会	『日華問題の全面的解決の為めに(第二輯)』
1943	8	22	言語上の政治性	『申報』
1943	8	29	昇官発財	『申報』
1943	8	29	昇官発財	『日華問題の全面的解決の為めに(第二輯)』
1943	9	17	支那料理論	『日華問題の全面的解決の為めに(第二輯)』
1943	9	19	論中国餐	『申報』
1943	10	7	武漢起義と官民協力の路線	『日華問題の全面的解決の為めに(第二輯)』
1943	10	10	武昌起義与官民合作路線	『申報』／『中国青年』3卷2期、1943年
1943	10	24	答悲觀論者	『申報』
1943			悲觀論者に答ふ	『日華問題の全面的解決の為めに(第二輯)』
1943	11	3	健康論—ハードン花園の一般開放を提議す	『日華問題の全面的解決の為めに(第二輯)』
1943	11	14	論健康一開放哈同花園之建議	『申報』
1943	11	18	重慶の命運—蒋介石の「中国の命運」に答ふ	『日華問題の全面的解決の為めに(第二輯)』
1943	11	24	重慶之命運	『申報』(～26日)
1943	12	12	初到上海的時候	『新東方』9卷1期、1944年1月15日
1943	12	12	法的神聖性	『申報』
			法の神聖	『日本の反省と中国の革新』
1943	12	17	日本の反省	『日本の反省と中国の革新』
1943	12	22	始めて上海に来た頃	『日本の反省と中国の革新』
1943	12	26	論恋愛	『申報』
1943			恋愛論の如く	『日本の反省と中国の革新』

年	月	日	論文名	出典
1943	12	28	答復一読者	『申報』
1943			收還租界的意義	『中国青年』2卷5期、1943年
1943			固積問題の政治的重大性	『日華問題の全面的解決の為めに(第二輯)』
1944	1	2	吉田東祐談青年運動	『太平洋週報』1卷94期、1944年1月15日
1944	1	3	雑誌出版の使命	『日本の反省と中国の革新』
1944	1	9	論墨子一獻給張一鵬先生	『申報』
1944			墨子論—新司法行政部長張一鵬先生に贈る	『日本の反省と中国の革新』
1944	1	15	日本の真意	『文友』2卷5期(17号) 1944年1月15日
1944	1	16	類無教有	『申報』
1944			類は教あるに無し	『日本の反省と中国の革新』
1944	1	20	日本の反省	『申報』
1944	1	23	助學金制度的意義	『申報』
1944	1	27	国共關係の再認識	『日本の反省と中国の革新』
1944	1	30	国共關係的重新估計	『申報』
1944	1		新中国青年之禁煙運動	『新生命』1卷1期、1944年1月
1944	2	2	助學金制度の意義	『日本の反省と中国の革新』
1944	2	6	「実業公司」時代	『日本の反省と中国の革新』
1944	2	6	“実業公司”時代	『申報』／『政治月刊』7卷2・3期合刊、1944年
1944	2	13	思想對策論	『日本の反省と中国の革新』
1944	2	13	論思想對策	『申報』
1944	2	20	中国は「モナコ」にあらず	『日本の反省と中国の革新』
1944	2	20	中国不是摩納哥	『申報』
1944	2	22	讀書の想ひ出	『日本の反省と中国の革新』
1944	2	24	社会批判力と禁煙三年計画	『日本の反省と中国の革新』
1944	2	27	社会批判力与禁煙三年計画	『申報』
1944	3	3	孫中山と米	『日本の反省と中国の革新』
1944	3	5	孫中山先生与米	『申報』
1944	3	6	讀書的回憶	『太平洋週報』1卷99・100期合刊、1944年3月6日
1944	3	17	上海に於ける物価問題の核心	『日本の反省と中国の革新』
1944	3	19	物価問題的核心	『申報』
1944	3	20	封印されたる苦悶	『日本の反省と中国の革新』
1944	3		胸中的苦悶	『新生命』1卷2期、1944年
1944	4	13	進歩的貪官汚吏	『日本の反省と中国の革新』
1944	4	17	頃東洋的宣伝の任務	『日本の反省と中国の革新』
1944	4	23	東方式的宣伝任務	『申報』
1944	4	29	現代大学教育を論ず	『日本の反省と中国の革新』
1944	5	1	「日本の反省と中国の革新」中国版への著者序文	『日本の反省と中国の革新』
1944	5	12	敷衍	『日本の反省と中国の革新』
1944	5	14	敷衍	『申報』
1944	5	21	農村消息	『申報』
1944	5	21	陳友仁先生の臨終記	『申報』
1944	5	28	陳友仁先生餘話	『申報』
1944	5	31	【隨筆】陳友仁先生の臨終	『大陸新報』(1958号) 4面
1944	10	26	【評論】重慶政權について(上)	『大陸新報』(2106号) 2面
1944	10	29	【評論】重慶政權について(下) —重慶全面和平を欲す 実現の鍵日本にあり	『大陸新報』(2109号) 2面
1944	8	31	我的重慶政權觀	『申報』(～9月2日)
1944			私の重慶政權觀	『重慶政權の分析』
1944			再び重慶政權について	『重慶政權の分析』
1944	10	16	再論重慶政權	『申報』(～18日)
1944	10		西洋文化与東方文化	『東方学報』創刊号、1944年

年	月	日	論文名	出典
1944	12	1	【評論】国民党の改組と国共合作（上） —何応欽は没落せず 今次改組は国民党派の充実	『大陸新報』（2142号）1面
1944	12	3	【評論】国民党の改組と国共合作（下） —ソ聯引込みを策す 熱意示す米国の肚	『大陸新報』（2144号）2面
1944	12	6	国民党改組与国共合作	『申報』（～7日）/『政治月刊』9卷1号、1945年
1944	12	9	市民慶祝大会吉田東祐演辭	『申報』
1944	12		文化人的任務	『重慶政權的分析』
1944			報答“讀者”先生們	『新生命』1卷3期、1944年
1944			世界戰爭与全面和平—吉田東祐氏答記者談話	『新生命』1卷5期、1944年
1944			世界的戰爭与中国之将来	『新生命』1卷5期、1944年
1944			蝙蝠的眼睛	『新生命』1卷6期、1944年
1944			對於最近物価狂漲的一個提案	『新東方』10卷5・6期合刊、1944年
1944			亞細亞的墨西哥化及其對抗的力量	『新東方』9卷4・5期合刊、1944年
1944			論中國知識人的動向	『政治月刊』8卷3期、1944年
1945	1	13	宋子文入閣与重慶的煩悶	『申報』
1945	1	24	涼台閑話	『申報』（～27日）
1945	7	29	我的必勝信念	『申報』（～30日）
1945			誰中國革命的領導者？	『新生命』2卷1期、1945年
1945			漢口之夜	『長江畫刊』4卷2期